

# 橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究

—第五報・橘純一と小林好日の交遊—

町 泉寿郎  
鈴木 亮

「橘守部・純一関係寄贈資料の整理と研究」の第五報として、このたびは橘純一と東京府立第一中学校で同級であった国語学者小林好日こばやしよしはるの書翰を紹介し、二人の交遊、延いては大正・昭和前期の国文学界の動静をも考察してみたい。

○

方言学の研究で著名な小林好日だが、自撰の履歴書（『いがぐり』三十号、昭和六十一年九月、東北大学文学部国語学研究室）、および福田淳子の執筆にかかる「小林好日」（『近代文学研究叢書 第六十三巻』平成二年、昭和女子大学近代文化研究所）に従って、先ずその略歴を概観しておこう。

小林好日は、明治十九年（一八八六）八月十九日、小林堅好、ことの長男として東京に生れた。明治三十年、開成中学校に入学するも、三年生の折東京府立第一中学校（現東京都立日比谷高等学校）に転校、ここで師福井久蔵をはじめ、純一らとの出会いがあったのである。なお、父堅好は同校の数学科教諭を務めていた。『日比谷高校百年史 中巻』（昭和五十四年、日比谷高校百年史刊行委員会）には、堅好について、

生徒というのは勝手なもので、自分の興味を惹く教科、得意な教科は、担任の先生をも好きになり、不得手な教科は自然先生をも敬遠したくなるものらしい。小林先生の担当であった「三角・測量」などその興味の有無の分かれる最たるもので、苦手な生徒は「先生の講義はモッチャモッチャしていて何が何だかよくわからない、酒を飲んで来るんじゃないかと思っていた。」などと語り、覚えていいることと言えば、渾名のゲタサンとその由来である先生の考案による常用の下駄靴（革靴の踵を高くしたものでつまり今いうハイヒール。現在では紳士用も出回っているが明治末期であるから特別注文して作らせたとか。）の事だけという有様である。一方この方面に興味を抱いた生徒は、修学旅行に携帯測器を持参して測定し三角法を応用して計算させたり、経緯儀を用いて実地測量を指導したりという教育方針のもと、測量機械を担いで嬉々として学校の周囲を歩き回っていた。

という記述がある。当時の堅好の教授振りが理解できよう。一中の『学友会雑誌』三十四号（明治三十四年三月）には、堅好の「球缺ノ体積ヲ表ハス式」、好日の「文学と宗教」が掲載され、父子で誌面を飾るに至った。明治三十五年、一中を卒業。翌三十六年、東京高等師範学校の予科に入り、本科国語漢文部を卒業（明治四十年）。さらに研究科（教育学専攻）に進んだ（四十二年卒）。同年十月には第一高等学校の検定試験を受け、「大学予科第一部ノ学科卒業ト同等ノ学力」を認められ、東京帝国大学文科大学に入学、明治四十五年（大正元年、一九一二年）七月に卒業した。

翌大正二年一月、二十六歳で神奈川県立第二中学校教諭（現神奈川県立小田原高等学校）に任じ、小田原に居を構えた。小説家尾崎一雄、詩人藪田義雄はこの時代の教え子である。大正八年（一九一九）には神奈川県立二中の職を辞して東京に戻り、大学令（大正七年）によって新たに大学に昇格した東洋大学から教授に嘱託され（一九三四、国学科）、その他に東京音楽学校（一九一九～二二）、東京女子大学（一九二二～二三）、法政大学（一九二五～三四）、大正大学（一九二七～三三）、千代田女子専門学校（一九二八～？）、二松学舎専門学校（一九二九～三一）にも出講。この間、大正十二年（一九

二三）からは鎌倉中学（現鎌倉学園高等学校）の教頭（一九二六校長）（一九二七）を務めた。

昭和九年（一九三四）八月二十二日、村岡典嗣教授との確執により東北帝国大学を去った山田孝雄教授（一八七三）（実際は一八七五）―一九五八）の後任として東北帝大助教授に任ぜられ（法文学部国文学第二講座担任、翌年教授）、国語学を講じた。方言研究というライフワークも定まり、昭和二十一年、「方言語彙学的研究」にて京都大学より文学博士の学位を授与される（昭和二十五年、岩波書店より『方言語彙学的研究』刊行）。戦中戦後の苦労は大きかったものの、研究は順調に進んでいた。ところが、昭和二十三年正月頃から風邪をひき、同年二月十一日、急性肺炎のため六十一歳で逝いた。三月には退官を控え、四月からは東洋大学への再就職も決まっていた時期である。墓所は妙寿寺（東京都世田谷区）、戒名を諦解院妙言日好居士と言う。東北大学における好日の後任には、佐藤喜代治（一九二二―二〇〇三）が教授として就任した。

○

本学に所蔵する橋純一宛小林好日書翰は、以下の十六通である。

- ①大正二年六月二十九日 封書
- ②昭和四年二月五日 封書
- ③昭和四年四月一日（消印） 封書
- ④昭和十六年二月八日 封書
- ⑤昭和二十年九月十七日 葉書
- ⑥昭和二十年十二月十五日 封書

- ⑦昭和二十一年二月二十六日 封書
- ⑧昭和二十一年三月二十一日 葉書
- ⑨昭和二十一年五月二日(消印) 封書
- ⑩昭和二十一年五月二十一日 封書
- ⑪昭和二十一年九月十四日 封書
- ⑫昭和二十二年三月二十五日 封書
- ⑬昭和二十二年五月十日 封書
- ⑭昭和二十二年十月二十三日 封書
- ⑮昭和二十二年?月十九日 封書
- ⑯昭和二十三年二月十九日(消印) 葉書(好日死亡通知、小林好吉発信)

今回は、この中から、純一との国文学上の交遊が特に窺える書翰①、③、⑥、⑪、⑭の五通を翻刻・紹介することとする。

《凡例》

- 一、今回収録した五通の橋純一宛小林好日書翰は、学校法人二松学舎所蔵にかかるものである。
- 一、収録順は、発信年月日順に従った。
- 一、先ず発信年月日、次に封書・葉書の別を明記した。
- 一、発信年月日は、消印、本文の内容から判断したものも存する。

- 一、仮名遣いは原文の通りとしたが、漢字は通行の字体に統一した。但し、固有名詞の表記に関してはこの限りではない。
- 一、通読の便を考慮して、新たに句読点等を附し、適宜段落を設けた。
- 一、破損等によって文字を缺く場合、その字を「」に括って補った場合がある。
- 一、書翰毎の末尾に【余説】として当該書翰の概要を記した。

① 大正二年六月二十九日（封書）

東京本所区〔小〕泉町〔橋〕純一兄

小田原幸三丁目四六二綿貫方 小林好日

（消印）「本所／＼2・6・30」、別筆にて「大正」の書入

拝啓 鬱陶しき日のみ打続き候。御かはりも御座なく候や。小生相かはらず恰好に教職に従事致し居り候。やはり小生は学究といふよりも教育者といふ側かと愚考致す事も有之候。君は荏原時代の経験を以て、教職といふものは厄介極まるものと御断定遊ばし候こと、存じ候へども、かの校は例外の例外の非常なる例外と悟り候。一度は公立の中等学校に従事して、まじめに教授訓育を研究して見ることも一生のうちのよき経験と存じ候。

行政の大整理、目覚しきものに候はずや。大正維新にてうれしきやうの感も致し候へども、又無常の心持も致し候。当県の事務官全部交迭、只今地方官会議も開かれ居り候まゝ、近々当校にも教員交迭あること、予想致され居り候。

国語調査会も文芸委員会通俗教育調査会も廃止されたる事に候へば、同窓の佐野・千田・東條の諸君の身にも影響ありたる事と存じ候也、如何。又橋本君はいかに致され居り候や。

国語に関する研究は、東京に居る時のやうにおもふやうには参らず、時間に余裕なしには候はねば、唯己れのあしき

故と存じ候。此休暇こそ大に勉強致さうと存じ候が、その目算は外れ候。本県の両師範学校と当中学校にて小学校教員の夏期講習会開かるゝ事と相成、当校は修身と教育学、及歴史を引きうくる事となり、修身と教育学は無理往生に小生に押しつけられ候。暑い真さかりにレクチュアやる事なれば、此夏の夏瘦はさぞく甚しかるべしと悲観致し居り候。今年はどちらかへ又御避暑に候や。若し当地方御通過の節は、御立寄願ひ候。時節柄、御自愛祈り上げ候。不備。

六月廿九日 好日 橘兄 梧右

【余説】

純一あて好日書翰のうち、最も早い時期に書かれ、かつ毛筆で書かれている唯一の書翰である【図版1】。大正二年は、前年七月に東京帝大文科国文学科（文学科国文学専修）を卒業した好日が、この一月に神奈川県立二中に就職した年にあたる。約半年が経過し教員生活に漸く慣れた頃に書かれたと見てよい。一方、純一は明治四十二年七月に同大同科を卒業後、四十四年九月十九日から同大助手として勤務し、大正二年十一月二十八日に陸軍教授に任官し幼年学校附となっているので、本書翰の時点では文科大学助手の研究職にある。純一に対する好日の「やはり小生は学究といふよりも教育者」という言葉は、これを念頭において読むべきである。また、「君は荏原時代の経験を以て、教職といふものは厄介極まるものと御断定遊ばし候ことゝ存じ候へども、かの校は例外の例外の非常なる例外と悟り候。」という記述は、純一がこれに先立って荏原の某学校で教員の経歴を持つこととそこで教員を続けることが困難な何らかの事情のあったことを示唆するものではないだろうか。それは、東京帝大卒業後、助手になるまでの明治四十三年のことと考えられる。

「国語調査会も文芸委員会通俗教育調査会も廃止」は、文部省内に設置された官制である国語調査委員会（明治三十五年設置）、通俗教育調査委員会、文芸委員会（同四十四年設置）がこの年の行政整理にともない六月十三日に廃止されたことをさす。国語調査委員会は、純一・好日等の師上田万年教授が主事した委員会で、表音文字の採用、言文一致、音韻組織

の調査、標準語の選定を当初の目的として掲げ、国語学に貢献する多くの調査を行った。「通俗教育」は今日で言う社会教育の意味で、委員会は教育図書編纂や懸賞募集、巡回図書館、展覧会、講演会、映画選定などを目的とした。同時に設置された文芸委員会も、健全な社会的風潮を振作するための文芸的著作物の奨励を目的とした。

「同窓の佐野・千田・東條の諸君」は、文科大学国文学科（文学科国文学専修）出身の先輩・同級者で、佐野保太郎（一八八七生）は明治四十四年卒、大学院に進み、のち文部省に入り図書監修官を務めた。千田憲（一八八九生）は明治四十五年卒、大学院に進み、のち神宮皇学館に教鞭を執った。東條操（一八八四生、明治四十三年卒）については第四報に既出。「橋本君」は言語学科（文学科言語学専修、明治三十九年）の橋本進吉（一八八二生）のことであろう。東京にある同窓・先輩の消息を気に懸けつつ、自らのほかどらぬ研究状況をかこつ、若き日の好日の心中が知られる。

④ 昭和四年四月一日（封書）

東京市牛込区市ケ谷仲ノ町四十一 橋純一様

鎌倉町扇ヶ谷十八 小林好日

（消印）「鎌倉／＼4・4・1」、別筆にて「昭和四年四月」の書入

新学年の準備教務で、お忙しいことと存じます。さてふと二松学舎の学則を見ましたら、今まで気がつきませんでした。が、第二学年は国文法と国語学が並置してあることを知りました。もしさうであつたら、「国語学及国文法」といふ受持講義目として二時間を充当し、小著を教科書としてゆつくり講義することにすればよかつたとおもひます。富士見軒の会合で俄かの御相談でしたから、少しもゆつくりした考究が出来ず、今にしては遺憾におもひます。あなたのお話では、国語学一時間といふことでしたから、それには小生の著述を用ひることは時間が許さず、あまり押売と思はれることのいやさ

に、あれを使用することを躊躇したのでした。

我田引水とお思ひかも知れませんが、私は私の信念から、やはり国語の教員を養成するためには（あなたのお説と少し衝突して失礼ですが）やはり語学的方面の素養をつけるために相当の時間を学生のためにお与へ下さる方がよいとおもひます。もうことしは何とも致し方もないことですが、将来何分の御考慮を煩します。どうも相かはらず言ひたいことを無遠慮にいふ性分で、勝手なことを申述べましたが、竹馬の友として笑つておきゝとり下さい。好日 橘大兄

【余説】

好日が二松学舎専門学校にはじめて出講するときの書翰である。住所が「鎌倉町扇ヶ谷十八」とあるのに注目したい。これより先、大正十二年四月から昭和二年四月まで、好日は鎌倉に住んで東京の私立大学への出講を続けながら私立鎌倉中学校の教頭・校長の職にあつたが（『近代文学研究叢書 第六十三卷』一三四頁）、校長辞職後もなお数年間は鎌倉から東京へ出講しており、昭和五年ごろ東京世田谷の三軒茶屋に移った。

国語漢文中等教員の養成を目的とする二松学舎専門学校の創立は、この前年昭和三年（四月二十一日開校式）のことである。「従来基盤が全くゼロという状態から出発する国語科陣容の構築」（『二松学舎大学百年史』四七六頁、昭和五十二年）については、主任教授に迎えられた純一が東京帝大国文学科の明治四十二年卒業の同期生（東京高校教授林昶・武蔵高校教授高木武・國學院大学教授山崎麓）を囑託として招聘し、専任教授としては純一のほかに藤村作から推薦された塩田良平（国文学科昭和二卒）を迎えることによって切り抜けた。漢文科では、山田準校長・池田四郎次郎主任教授・佐倉孫三専任教授・那智佐典（駒沢大学教授）ら二松学舎出身者のほかに、頼成一（東京高校教授、文学科支那文学専修大正七卒）・西沢道寛（大正大学教授、支那文学科大正十五卒）を囑託として招聘した。

初年度は在学生が一部・二部（夜間部）の一年生のみであったが、翌年からの生徒数増大にともない更に国漢ともに陣



容の増強が必要となり、森本治吉（国文学科大正十五卒）と布施欽吾（支那哲学科昭和三卒）を新たに専任教授に任じ、国語科では好日のほかに池田龜鑑（東京高校教授、国文学科大正十五卒）・萩原芳之助（慶大講師、国文学科選科卒）・和田英松（東京帝大史料編纂官、古典講習科国書課卒）・山本信哉（東京帝大史料編纂官、國學院卒）が囑託となり、このほかに東洋史に専任教授三島一（東洋史学科大正十五卒）に加えて加藤繁（慶大教授、支那史学科選科卒）を、教育学に専任教授柿山清に加えて海後宗臣（東京帝大助手、教育学科大正十五卒）を同様に迎えた。東京帝大文学部卒の新進学者の起用が目につくが、好日は四十四歳、純一は四十六歳の壮年であり、全体として各年齢層を適宜に配した布陣と見える。それでもなお、夜間部学生の一部には、無試験検定の資格獲得に関する懸念が背景となって、漢文科に比して国語科教員に遜色ありとして、理事に国語科教員の増強を申し出る者があったというから（橋純一「国語科の一角から」『二松』十八号、昭和十二年十月）、純一が国語科主任としてその教育体制の確立に苦心したこと、想像に難くない。

好日に対しては、この年一・二月の交、二松出講に関する折衝のために純一が鎌倉を訪ねている。好日は旧友の薦めを受諾したが、ただし以前から出講している「法政高師部」と交渉した結果、引き続き出講を懇請され、「今年一年は留任止むを得ることゝ」なったので、「法政の帰途、立寄り得るやう時間割」を組んでほしいと純一に要求しており、結局、二松学舎専門学校には講師として出講するに止まった（②書翰）。

「二松学舎の学則」に関しては、昭和三年二月文部省認可の「二松学舎専門学校概要」（『二松』創刊号、昭和三年十二月）に第二学年の国語科の科目として「講読・文法・作文・作歌・有職故実・文学史・国語学概論」と見えており、「国文学と国語学が並置」とは文法と国語学概論が併記されていることを指すと考えられる。好日が純一から依頼された講義は、「国語学」一時間であったが、「国語学」のほかに「文法」一時間があるのなら、二時間の「国語学及国文学」として担当することにしたかった。来年のカリキュラム作成時には考慮してほしいという要望である。好日が教科書として使用したいと

考えていた自著としては、『新体国語法精説』（大正十三年、大同館。大正十一年、育英書院刊の処女出版『標準語法精説』の原版を震災により消失したため、別の出版社から再刊）、もしくはその増訂版というべき『国語国文法要義』（大正十五年、京文社）が想定される。

「国語の教員を養成するためには（あなたのお説と少し衝突して失礼ですが）」以下の記述から、純一が主導した国語科のカリキュラムに対して好日が語学面での不充分さに不満を感じていたことがわかる。

⑥ 昭和二十年十二月十五日（封書）

東京都大森区久ヶ原町二九五 橘 純一様

仙台市 東北帝国大学法文学部国語研究室 小林好日

昭和廿年十二月十五日

拝啓 いづこも敗戦後の日本は浅ましい姿と成り、生活が苦しいやうですが、御全家如何御くらしですか。陸軍はお辞めになつても二松の方は御つとめかと存じますが、お閑になつた時間はどう御利用か伺ひたいとおもひます。この間、突然伊香保から東條君のたよりがあり、かの地に御ひきこもりの事も意外でしたが、震災には遭はれなかつたと斗り思つてゐた同君も、研究材料を失はれたとは初耳でありました。

震災にあひました小生は、勿論みじめなものです。殆ど普通の生活が出来なくなり、他人の家の二階を借りてゐては寒風に吹曝されて、戸外で炊事しなければならぬ妻子を見て、どうしたらよいか困つてゐました。然し、おもはぬ手づるがあつて家が見つかり十日ほど前、独立の生活ができるやうになつたときには、ホッとしました。勿論その家は場末の賤が伏家で、このまゝ落つけるやうなところではありません。然し、これまで不愉快な人間ばかり多かつた隣組といふものが、

こゝでは趣が異なり、却つて温情のあるのは珍しい経験といふべきものでありました。

さて、小生はこれまで東北の方言をしらべて、その必要上近代語の文献も調査してゐましたが、その結果今度はむしろ主として江戸時代語の研究にとりかゝらなければならぬやうな成行になつて来ました。ところが江戸文学といふものは好きでなく、それを読むといふ事が苦手であつた為に、手許に資料が無いのです。山崎君が存生ならば助を得られるのですが、今は援助を乞ふ人もありません。同君の遺族のところは普通の刊行書位は残つて居りませんか。さしあたり、近代日本文学大系・洒落本大系・日本名著全集といふやうなものが是非欲しいのですが、御心あたりはございませんか。

大兄はこれらのもの若しくはその他関係の書類を持つてお出でゝありませんか。お譲りくだされば幸に存じます。御自愛願ひ上げます。好日

橘 大兄 通信は依然研究室あて願ひします。

#### 【余説】

「戦災にあひました小生」とある如く、昭和二十年「仙台市米ヶ袋中坂ノ通三〇」(④書翰住所)の家が全焼する。その後、妻子を山形へ疎開させ、自らは東北大学研究室で自炊生活を送る。九月に入つてようやく「仙台市小田原車通四番地」の「他人の家の二階を借り」妻子を呼び寄せることとなり(⑤書翰)、十二月初めになつて何とか一軒屋である「場末の賤が伏家」に引越し、近隣の温情にふれてホッと一息ついたのである。しかし「このまゝ落つけるやうなところで」はなかつたため、翌年三月に更に「仙台市北八番町二」(③書翰住所)にある「タツタ八畳と六畳二間」(⑩書翰)の家に転居し、これが好日終焉の家となる。この時点で、小林の家は好日、喜年夫人と三女禮子の三人暮らしである。

『東北の方言』(昭和十九年、三省堂)に代表されるように、好日は東北の方言に関しての論文を多く執筆して来た。「その結果今度はむしろ主として江戸時代語の研究にとりかゝらなければならぬやうな成行になつて来」た。そのために、好

日は近世文学に関する資料、また関連の書籍の提供を純一に依頼した。好日晩年の研究への視点が窺える記述である。しかし、戦後の混乱ゆえか、或いは病ゆえか、或いは学位請求論文の整理等に精力が費やされたためか、「橋本博士の追憶」『国語と国文学』二十二巻五号、昭和二十年十二月）を最後に新たな論文は公表されず、好日の近世文学研究の成果が知られることはなかった。

「近代日本文学大系」(国民図書)、「洒落本大系」(六合館)、「日本名著全集」(日本名著全集刊行会)の三点は「是非欲しい」と記しているが、いずれも当時における近世文学研究に際して必須の文献と言えるものである。「山崎君」は、④書翰で前述の山崎麓(近世文学、一八八三—一九四三)。純一とは府立一中と東京帝大国文学科の同期である。純一は小林の書籍譲渡依頼を承諾し、書籍を好日のもとへ届けることとなった。⑦書翰には、

過日は伴久美に国語学書沢山にお譲り下さった上に、小生へも叢書類お持たせ下され、御好意ありがたく感謝いたします。伴も帰つて来て思ひがけぬ仕合せしたことを喜んで居ります。伴の伝言によつて、小生頂戴の分には代償を御手紙でお知らせ下さる由伺ひ、心待ちに待つて居たところ、思ひがけぬ今度の金融緊急措置条例が出て、全く困つたことになつたと当惑して居ります。一時は今のうち旧円でお送りしようかとも思つて見たのですが、それではお役に立たないし、それを承知の上でお送りするのも失礼のわけ、どうしようかと郵便局や銀行にも参つて相談しましたが、よい方法も分らずぐずぐずしてゐましたが、何とも申上げず置くわけに行かず、こゝに御指図を仰がうと決心したわけです。やはり適当な代償を御申越願つた上で、新円が出てからお送りする外ありませんまい。但し、さうすればこれから世帯主参百円でやつて行く以上、一度で沢山をまとめて差上げることは心細くもありませんから(貯金を出してお送りする方法でもあるのでせうか)何回かに分けてお送りすることを許していただくかなくてはならぬかとおもひます。とあり、二十年末から二十一年初にかけて好日が純一のもとに学生を派遣して、純一から書籍類を受け取ったことがわか

る。「伴久美」は、のちの実践女子大学教授内尾久美（一九二二—）。内尾は東北帝国大学法文学部を昭和二十二年に卒業している。追って譲渡の代金を支払おうとしていた矢先、二月二十五日に新円切り替えに伴う金融緊急措置令が出されたため、予定していた送金が困難になったので、純一の指示を仰ぎたいというのである。この後も病氣入院が重なって送金に手間取り、⑩の書翰に拠ると、

度々御手数をかけましたが、個人としては送金できないと云はれ、学部長の証明により小切手で御送金できる事になりました。何をするにもムダな時間つぶしと心配をしなければならぬ世の中です。お送りするにも書留だけでは紛失する虞がありますから配達証明に致します。三月病氣をする前から、心配しつゞけてゐたことがやつとかたついで、今ホッとしてゐる氣持をお察し下さい。

とあり、五ヶ月後ようやく送金の目途が立ったことが分かる。

⑪ 昭和二十一年九月十四日（封書）

東京都大森区久ヶ原町二九五 橋純一様

仙台市 東北帝国大学法文学部国語研究室 小林好日

昭和廿一年九月十四日（消印）「仙台／21・9・15」

拝復 この間から御たよりしようと折々おもつてゐるところへ御手紙頂戴、有りがたうございました。病氣についての御心づかひ痛み入ります。いつか御来仙の時の御来訪にもお目にかかれませんでしたから、お互に顔を合せない事がもう何年になりませう。遇つて見たらどんなにお互の変化に驚くことかとおもひます。それだから御身辺の御様子を何かとしたりめて下さつたのを嬉しく拝見しました。中々このごろの生活は並一通りの苦しみではなく、油断もすきもないのです

から、好きな本がよめて日が暮せるのに満足して、栄養失調になる位は我慢しなければならぬのでせう。大兄は陸軍の方はお止めになつても東京でおつとめの口はあり、お貸しになるお屋敷はあるとおもふと、まづは境遇としては上の部といはなければならぬかとおもひます。マッカーサーの指令で傷ついた人も大分あるらしく、高木市之助君はもう辞めて箱崎に隠退したさうですし、久松君も辞表を出したとか出すのだとか噂があります。各大学に公職追放になつたものは幾人もあつて、しみぐ／＼有為転変の世だとかこたれます。

戦災に遭はなかつた人に比べると小生などは悲惨なもので、衣類をしまはうとおもつても筆筒はおろか箱一つなく、仕方がないから押入れにつき重ねておいたら、折角のセルのきものを虫が食つてしまつて孔だらけにしてしまふし、永く無しですましておいた味噌播鉢もいつまで無しですまされないから買はうとすると三十八円といふべら棒な値段、新円が惜しいからもう少し我慢しようかなどいふ情ない始末なのです。それだから大兄が御らんになつたらあれでよく我慢して行けると驚かれるかも知れませんが、もう何もなくてもさきは知れてゐる、幾年生きられるものでないとおもふものですから、割合よく諦めて居ります。いつかも申上げたやうに、中学時代には小生の貧書生と比べてあれほど羨しくおもつた大家の若旦那であつた大兄には一しほこのごろの世の荒い風が身に沁む思ひをなさるだらうと思ふ事があります。それに比べると、始終実につらい事ばかりと嘆くときがありますが、それなら若い時はどうだつたと自分で自分に云ひきかすことが多くあります。御心におかけ下さつた二兄も帰りました。久しぶりでとりかへした一家団欒の生活を眺めると有がたさ身にあまる思ひをすることもあります。二兄は六月末相ついでレンバン島から帰つて参り、急に生活費が嵩んでこまりましたが、このほど当市中に就職ができて、今月から二人とも俸給が貰へるやうになりました。兄は大病院の齒科に無給で入れて貰つたが、三月を迎へて今月から有給になるさうですし、弟は農林中央金庫につとめて、時節柄こゝの支所詰にして貰へました。然し仙台にお出での大兄には御想像つきませうが、拙宅

は青葉神社前通りの通町寄りの北八番町ですから、場末のまづ貧民窟まがひ、タッタ八畳と六畳二間の家に大きな人間が五人暮すのですから、昔のことを考へるとよく住めると思ふくらゐです。そこへもつて来てこのごろは結婚難といふのですか、二児にしきりに嫁を貰へとすゝめる話が起つてゐますが、どこに嫁を坐らせる余地がありません。

後の時代の人は想像もできないだらうとおもはれる今日の困窮生活を、細大洩さず記しつけておいたら面白からうといはれる大兄の御提案、これは大賛成です。ツキディデスがペロポネサス戦後の内乱、国民生活の窮乏を見て、同じ事が後の代にもあるに違ひないから、委細したゝめておきたいとてペロポネサス戦記をかいたのだと何かの雑誌にかいてあるのをこのごろ読みましたが、若し御かきになられたら今の世の有さまを記して出版なさるのをおすゝめします。小生もお手つだひしたい位におもひます。大兄は文才のある人です。必ず面白いものができませう。小生はあれほど文学畑の人であつた大兄が、こゝ何年か語学的方面の仕事にばかり携つて居られるのを不思議におもつてゐます。中学時代、大兄がよく歌をよまれたし、「新声」といふ雑誌の読者大会であつたか何でありましたか、大兄たちの写真が、「新声」誌上に載つて羨しく思ひた<sup>(ママ)</sup>こともありませう。あの会衆の中の前列に天沼貴彦氏が私服姿でステッキをたてゝしやがんで居られる美青年姿など、今もおぼえてゐます。あれも大兄の若いころのゆかいな生活の一片であつたらうとおもひます。小生はあのころは自然科学を研究したく中学を出てもその方面に行ければ行きたいと熱願してゐたのですから（それが出来なかつたのも貧故）、文章など書ける筈はありません。今でもおもふ事が書けないので情なく思ふことばかりです。大兄の兄上が小栗風葉の代作をされた由いつか大兄が至文堂の雑誌におかきになつておもしろいと思つたのですが、大兄には豊かな文才があまりの事を羨しくおもひます。思ひ立つたが吉日、成るべく早く世相を興味津々たる筆にのせて下さい。

内田君、随筆の大家とは想像しませんでした。あの若いころの瀟洒たる姿は、ハッキリ目に浮びます。一つには同君もあのころの京橋日本橋組の富裕階級の坊ちやんでリファインドしたスタイルが我々の目を惹いたからかとおもひます。

内田君などは、一生を幸福に生き通すことのできた人でせう。隨筆をかいてくれと、方々から引張風の由、それでもトン／＼書けるから結構なので、小生はどうもいくら書かうとしても気のきいたものは書けず、ヘンに堅くるしいものにばかりなつて、我ながら愛想がつかます。どこからも頼んで来ないから仕合せです。こゝの岡崎君にはしきりに頼みにくるらしく、先月は雑誌の原稿で一万円かせいだと云つてゐました。岡崎君はからだ弱くて、力のいる仕事は何一つ出来ず、薪の配給のあつた時も細君が卒業生をつれてきて研究室に運び込んだ位です。然し食ふ為には買はなければならぬからとてセッセと書いてゐます。「人間」といふ雑誌に三十枚書いて八百円だつたといふ相場です。内田君はもつとよいのですか。小生はたのまれないからよいやうなもの、頼まれても今の時勢にあふやうなものは一寸書けさうにありません。

中学の同窓はなつかしいものです。こゝに来て、同じ五年で甲組であつた窪田君とは、特別の交情を持つてゐます。高木君が箱崎に引退したといふ報知を、刑法の木村教授が九大から受けたから、早速高木君に手紙を出した処、返事を呉ませんでした。若いころの交であつたら、吉凶につけてそんなことはありませんまい。内田君が大兄のお宅にお居(ママ)られるよい機会です。お目にかゝりたいとおもひます。中学時代には遠く眺めたといふ程度で口をきいた事は恐ろくなかつたでせう。然し今にして御面晤できたら、嘗て交際があつたやうな気でお話できるだらうとおもひます。

御令息が貸本屋をお出しになる由、どういふ学校をお出になつたのですか。お嬢さん、およめに行かれる由、大兄も辣腕です。小生の三女も二十ですが、嫁にやらうにも何も仕度はできず、あきらめて女中がはりに台所ばたらきです。女房が横着で、娘が働いてくれるのをよい事にしてゐます。女房は始終男の子にたしなめられてゐます。

尤も小生もこのごろは何一つ立ちはたらきができなくなりました。もう坐ると立つのが一骨折で、二児の復員と同時に薪を切ることなど、一切かれらにまかせて動かないことにしてしまひました。身体が弱つた為に痔になつたのか、痔になつたから予後がわるいのか、あれから身体の自由がきかなくなりました。研究室まで通ふために脚が脹れてしまつてゐま



す。ビタミンBとかCとかを毎日長男が注射してくれてゐます。その為に治つたやうに思はれる事もありますが、やつぱり今も帰宅するとブク／＼に脹れてゐます。然し十八日から口述試験があるから読んでくれと岡崎君が催促するので、毎日研究室にかよつてゐます。小生の講坐が三篇、岡崎君の講坐のが六篇、日本思想史の一篇。それを手つとり早くよまなければならぬのだから、頭痛鉢巻です。小生の専門のはたのしくよみましたが、あとはイヤ／＼よんでゐます。二三年前までは年をとつても案外気力があると自惚れてゐましたが、年はあらずはれぬもので、ことしから急にダメになつてしまひました。折々は再来年定年退官になるを待たずにポッキリ参つてしまふことがありはしないかと心配することもあり、そんな心配をうっかり口にするのもあるので、子どももしきりに老父をいたはつてくれます。そんなことで家になると何一つせずにジツと坐りきりにできます。

それにつけても、世の中がどうか持ちなほして物価でも下つて呉れなければ、退官後まだ衣食の為に働かなければならず、それかと行つて方々駈けずりまはつてかせぐことはできさうもなく、今から心配してゐます。この女子職業の校長は小生の青年時代の同窓で、その人の話で、そこに国語を教へてゐる大矢泰英といふ人は三矢禪英と同期だといひましたから、大兄と御同窓なのでせう、ひどく老衰してゐるさうで、何もできないが今になつては断ることもできないからつかつてゐると云つてゐます。そんなになつてヨボ／＼と働きたくないものです。同氏を御承知ですか。小生はどういふ経歴を持つた人か、今日まで知りませんでした。

東條君からこの間たよりがあつて、とう／＼又学習院につとめる事になり、時節柄、文部省に諮問の為、會議に出ると云つて来られました。その手紙をなくなしてアドレスが分らぬので、学習院あて返事を出しましたが、若し住所を御承知なら、お序の節、教へて下さい。もとの長崎町の旧宅ではありませんでした。小生が弱つたにつけては、福井先生が今日まで元気で居られたのを今更驚きます。やはりあれで精力がある方であつたのでせう。今はどうしても八十から九十の間

のお年だらうとおもひます。

何かと心細いことばかり書きつゞけましたが、もう一ぺん壯者をしのぐ位の元氣を取り戻すやうお互に工夫ませう。六十を越して数年は、人間が一度急に弱る時ではないでせうか。橋本君が六十三で死にしました。こゝの村岡君も正に六十三、植松君・小倉さんその他、こゝ一兩年知った人が死にましたが、大体その位の年恰好ではないでせうか。この時期を突破すると又元氣を恢復して生きつゞけることができるやうにも思はれます。生活に苦しいのはイヤですが、それかと云つて早く死にたくはありません。どうか時々御近況おしらせ下さい。小生もかきます。内田さんによろしくお伝へ下さい。

十四日 好日 橘学兄

#### 【余説】

好日書翰のうち最も長文で、無野の用箋五枚にびっしりと書かれ、被災と物価高騰、加えて病苦による生活苦が紙面に満ちる。去る三月に痔瘻を発病したが、一ヶ月放置したため病状が悪化し、手術を受け、四月二十一日まで一ヶ月弱の入院生活を送ったと報じている。栄養失調のため、退院後も体調は決して良好とはいえない。

家族の近況としては、小林方では東南アジアの戦線にいた二人の息子が、六月末に相次いでレンバン島（※インドネシア領、Rempang）から復員した喜びは大きかった。好日は喜年夫人との間に長女日出子（一九二三歿）・長男好吉（一九一八生）・次男陽彦（一九一九生）・次女葉子（一九二三生）・三女禮子（一九二七生）の二男三女を儲けたが、ここに長男・次男が加わり一家は五人家族となった。喜びの反面、家族が増えたことによる困窮を懸念したが、二児がともに就職したと報じている。長男好吉は東京高等歯科医学校に学んだ歯科医師、未婚の娘は三女禮子である。一方純一は、これに先立ち息子の貸本屋開業と娘の結婚を報じていた。⑫書翰の「御次男首尾よく御成業御就職の由、祝着至極。いつか次の方が千鳥町マーケットに店をお出しになったと伺ひました」と併せ考えると、貸本屋を営んだのは三男力三（一九二五―

二〇〇四）であろう。結婚した娘は玉谷氏に嫁したタミである。長男茂一は既に病没し（昭和十六年）、次男文二は二松学舎専門学校を昭和二十二年三月に卒業した。四月頃からは府立一中の旧友内田清之助（第四報参照）の一家が純一宅に寄留していた。

知友の近況に関しては、中学時代の懐古と共に旧友・同僚の老いと死が多く語られている。「大矢泰英」と「三矢禅英」は純一の東京帝大国文科の同期で、その勤務先「女子職業」は東北女子職業学校（三島学園の前身）。三矢禅英は東大の卒業生名簿では三矢英松とある。「橋本」は①書翰に既出の東京帝大文学部の橋本進吉教授（一八八二—一九四五）。「村岡」は東北帝大法文学部国文学講座の同僚で、日本思想史学の草分け村岡典嗣教授（一八八四—一九四六）。この年、四月十三日に歿した。「植松君」は台北帝大文政学部の植松安教授（一八八五—一九四五、東京帝大國文明治四十一卒）。「小倉」は朝鮮語学・日本語学の小倉進平教授（京城帝大・東京帝大、一八八二—一九四四、東京帝大言語学明治三十九卒）。雑誌の依頼原稿に健筆を揮っている「岡崎君」は、文芸学の提唱者として知られる岡崎義恵（一八九二—一九八二、東京帝大國文大正六卒）。なお、口述試験に関して「小生の講坐が三篇、岡崎君の講坐のが六篇、日本思想史のが一篇。」とあるように、国文学講座のなかに好日の国語学・岡崎の文芸学・村岡の思想史学が同居していた当時の東北帝大の事情が知られる。

また、府立一中時代の懐古も興味深い。好日自身については、「小生はあのころは自然科学を研究したく中学を出てもその方面に行ければ行きたいと熱願してゐたのですから（それが出来なかつたのも貧故）」という記述が目を惹く。文学志向の純一と自然科学志向の好日とは、家庭環境の違いもあり、中学時代には親交があったとは言えないかも知れない。純一に関して、「大兄たちの写真が、（中略）「新声」誌上に載つて羨しく思ひたこともあります。あの会衆の中の前列に天沼貴彦氏が私服姿でステッキをたてゝしゃがんで居られる美青年姿など、今もおぼえてゐます。」とあるのは、文学雑誌『新声』

の七編一号（明治三十五年一月）に掲載された「第二回弦月会来会者写真」【図版2】を指す。弦月会は東京在住の誌友懇談会の名で、その第二回が明治三十四年十月二十七日に上野公園の三宜亭で開催された。「前列に天沼貴彦氏が私服姿でステッキをたてゝしゃがんで」という小林の回想とほぼ一致する写真の構図が確認できる。会の様子は萍緑庵「弦月会の記」〔『新声』六編五号、明治三十四年十一月〕によって知られ、高須梅溪・正岡藝陽・田口掬汀らが発起人となっており、河東碧梧桐や平福百穂、純一の府立一中の後輩土岐善磨らも列席した。当日の参加者七十四人全員の氏名も列記され、純一の旧姓児島は「児島青嵐」一名のみで、これが純一のことと考えられる。ただし、天沼貴彦の名は見えず、小林の記憶違いの可能性もある。なお、『新声』七編一号所収の「朝霜（卯月会詠草）」には青嵐の作歌を六首収め、別に筍晝会なる「新声和歌」合評会でも青嵐作歌がとりあげられている。「朝霜」所収歌を純一最早期の創作として、ここに掲出しておく。

常夜灯のひかりをぐらき広前に落葉をさそふあけがたの雨

榊花落葉しそめしあしたより時雨つねなき雑司ヶ谷のさと

そゞろにも駒の手綱を引きしめぬ山風さむく雁なくゆふべ

有明の月にいはゆる駒のこゑさむきおほ野に霜ましるなり

うちわたす駒の蹄も見ゆるまであきの大川みづやせきけり

みやこいでゝならはぬ旅の今日二日膽吹の山に残る月見る

次に「マッカーサーの指令」すなわち「教職追放令」（教職員の除去、就職禁止及復職等の件、昭和二十一年五月七日公布）の時世を反映した戦々競々たる状況も伝えている。好日と東京帝大で同期の九州帝大教授高木市之助については東北帝大同僚の木村亀二教授からの伝聞として「もう辞めて箱崎に隠退した」と記し、久松潜一東京帝大教授についても「久松君も辞表を出したとか出すのだとか噂があります。」と記している。履歴書によれば、好日が東北帝大内に設けられた教

員適格審査委員会による適格審査によって適格と判定されたのは、「昭和二十一年九月五日」のこととされるが、それでは本書翰の時点で既に好日は適格判定を受けていたのであろうか。一方で昭和二十二年三月二十五日の⑫書翰に「適格審査はどうなりましたか。こゝでも委員会がありました。極めて寛大で、法文学部全体で不適格タッタ二人と云ふのですから、大兄のごときは別に問題になるべきもあるまいと思ひます。東京の和辻君、もつとヒドイ久松君など皆立派な適格ださうです。」とあり、「昭和二十一年九月五日」という時期にはいささか疑問を感じるのである。各帝国大学においては、独自に適格審査委員会が設けられ、その審査過程では事前に学部ごとに不適格者の枠が決められたとも言われる。三人枠が決められた東京帝大文学部では、平泉澄・板澤武雄両教授（国史）が辞職し、高田真治教授（支哲）が追放となって終息したのである。

一方、純一は昭和二十二年一月十八日付で東京地区集団第二教員適格審査委員長から適格の判定書を受けた。その判定書の文面は次の通りである。

右の者は昭和二十一年勅令第二六三号の規定によって提出した書面を審査したところ昭和二十年十月二十二日附聯合国最高司令官覚書書日本教育制度に関する管理政策、同月三十日附教員及教育関係官の調査、除外認可に関する件及昭和二十一年一月四日附同公務従事に適せざる者の公職より除去に関する件に掲げてある条項に当たらない者であると判定する。

これに先立ち、何篇かの論文を委員会に提出し、さらに二十一年十月十七日には非公式に弁明書を提出した。残されている弁明書の控えは、二百字詰め原稿用紙二十一枚からなり、初めに「一、私の日本神話解釈の態度及その解釈の結論要項」「二、日本建国の民族精神史的事実」の二条にわたって自己の学説に関する具体的な弁明を行い、末尾に「私の自己弁解として申上げたい点」として次の五項目を強調している。左に抄出しておく。

一、国文学者として、文献学的方法を基礎とし、之に民族心理学的法則を応用して学問的な線に沿うて研究した結果を発表したので、時局便乘的態度、軍国主義鼓吹に陥つたやうな結果はない。

二、当局の忌諱に触れることを恐れたため、神々の上には極度の敬語を用ひるやう注意しましたので、その点何やら神憑りらしくも思はれたかも知れませんが、論の進め方から結論への達し方には相当実証的手続を尽くしたつもりであります。

三、天皇の御祖としてわれわれの祖先たちが崇拜した天照大御神なり、御歴代の天皇なりを崇敬することは、日本が国をなしてゐる限り、吾々に一民族としての意識が存する限り当然のことであり、一君万民の事実に於てこそ眞の民主主義が行はれ得るのではないかと存じてゐます。但しその「君」は日本神話に拝する皇祖神の如く、広く高く吾等の生活全般を「しろしめし」給ふべきもので、歴史上における英主の如く、御親ら政治し給ふべきものでないこと、勿論です。

四、小学国語読本巻十一「源氏物語」削除の運動も、私一人の行動で、誰とも私協力をしませんでした。私は、国士館専門学校で簗田胸喜氏とも同僚でありましたが、あの狂犬のやうなやり方が大きらひで、(勿論、あの思想もきらひです)、この事について語つたこともありません。当時貴族院で、羽振をきかしてゐた菊池男爵とか何とか磐楠などいふ、忠君を自家専売のやうな顔をしてゐる人のやり方も実に不愉快に思つてゐましたので呼かけませんでした。この運動を起した時、岡部長職(その後文部大臣になつた人)氏主宰の「メートル法反対」の会から入会を勧めて来ましたが、私は、メートル法施行は賛成だといつてことわりましたやうな次第で、右翼的傾向の人たちには近づかぬやうにしてゐます。「源氏物語」反対も、源氏物語その物への反対ではなく、これを小学校読本の教材に持ち込むことの教育上の影響について憂慮したのに因ります。

五、私は古くから発音式仮名遣論者で、多くの国文学者が歴史的仮名遣を固執してゐる保守的態度に慄らぬものです。これは私が、必ずしも頑固な保守一点張の人間でない傍証にならうかと思ふからであります。

好日は教員適格審査にどのように応じたのであろうか。純一の弁明書から、戦中戦後を生きた研究者、とりわけ国文学・漢学に携わった者が、教員適格審査に際してどのような心境で、どのような態度をとったか、更めて検証する必要がある。感じた次第である。

⑭ 昭和二十二年十月二十三日（封書）

東京都大田区大森久ヶ原町二九五 橋 純一様

仙台市北八番町二 小林好日

十月廿三日

久しく御無沙汰しましたが、御かはりなく御くらしですか。先月廿七日に東大で国語学会があつて上京して、今月の四日に帰りました。今日の食料不足の時代は、どこに厄介になつても迷惑ですからゆつくりは出来ず、大兄をお訪ねすることもしないでしまひました。宮永君から上京の機会があれば、三五会をひらくからあらかじめ通知せよとあつたので、早く通知しておいたのですが、十四日の消印の手がみが廿七日に近くついたので準備できず、宮永君宅を訪ねたら猪狩といふ男が一人来てゐました。（十五日から水害で汽車不通の為郵便延着）上京の廿五日はまだ東北本線開通せず、常磐線も途中徒歩連絡といふので、北陸を迂回、ひどい苦しみをしました。

今度の上京は学会の為ばかりでなく、来年退官後の生活の方法も考へておく為でありました。準備なしに退官してしまふとひどく困る由、窪田忠彦君からきいてゐましたので、何か目鼻だけつけておきたくおもひました。目白の女子大に参

りますと（同校につとめてゐる人に、ある学生の下稽古をたのむ為）偶然その日から講義に東條君が出られることになつてゐたので、しばらく話しました。五六校ぐるは出講してゐるか尋ねましたら、イヤ無数だよといはれました。一ヶ所で二三百円位の収入らしいのですから、沢山掛持しなくては生活できないらしいのです。それには小生も困るとおもひます。神保君などは少し、か講義に出ないかはり、「貧民」の生活をしてゐると云つてゐました。ヤミ屋がフンダンに金をかきあつめ、前に細民だとおもはれたやうな連中がこのごろ大福々で、われ／＼が食ふに困るやうな今日の時世は決して健全なものでありません。とにかく上京後の生活をどうしたらよいか心配して居ります。

二松学舎はもう衰頹の運命に在ると前から想像してゐましたら、反対に東京の学校のうちでもつとも経済のゆたかなところときかされて、驚きました。それだけでなく、塩田良平君が専務理事などいふのですから、一体どうした事かとおもひました。あすこでは大兄が中心で、塩田君などはその下に在るとおもつたのに、嘗て伺つた処によると、大兄はあまり学校に關係なさらぬやうですが、どういふ事情なのでせうか。あすこには西沢道寛君がゐりましたから、今度も会つて見ようとおもつてゐましたが、もうとつくに胃潰瘍で死んだ筈と云はれて、遇はずにしまひましたが本当ですか。

このごろは小林昌治君とおあひになりませんか。今度久々で遇つたところ、九段の持家を小林国語研究所といふ財団法人とし研究室一間居室一間貸すと申します。そのかはり、只今小生所持の蔵書を十萬円で譲渡する条件で小生の生きてゐる間は、自由に書物を利用してよいといふことです。小林国語研究所といふのは、小生の小林に通ずることを利用して、昌治君のものとする意向らしいのです。今は住宅難の時有がたい事とおもひましたが、こちらに帰つて考へると、イヤ気がさしてしまひました。十萬円といふのも少しやす過ぎるやうです。それだけでなく、同人は喧嘩早い男ですから、小生との間柄がまづくなつた切合、本を売つてしまつてゐては困る事がありはしないかとおもふのです。

きくところによると、方々が単科大学になるといふ中に國學院と専修大学は廃校になる由、これも意外なことにおもひ



ました。学校までも有為転変を免れぬ時勢なのでせうか。

こゝに来て落ついて研究をたのしみましたが、退官を前に浮腰になってしまつて、心はしきりに東京に飛びます。早く東京に帰つて諸友と旧交をあたくめたくおもつて居ります。御自愛祈ります。十月廿三日 好日 橘学兄

### 【余説】

昭和二十三年三月の東北帝国大学定年退官を控え、再就職先について心を悩ましている時の書翰である。「ヤミ屋がフンダに金をかきあつめ、前に細民だとおもはれたやうな連中がこのごろ大福々で、われ／＼が食ふに困るやうな今日の時は決して健全なものでありません。」という戦後社会の急激な変化・経済的混乱に対する憤懣は、⑬書翰では「隣近所が職工かその少し好い位のつとめ人ですが、生活は今日それらと同じ程度になつたらしく、日本の安定勢力と思はれた中産階級が全く亡びてしまつたのではないかと思つてゐます。」という注目すべき言葉で記されている。

「先月廿七日に東大で国語学会があつた」と記されているが、これは昭和二十二年九月二十七日午後一時半より、東京帝国大学法文経三十六番教室にて開催された東京第十一回「公開講演会」のこと。歟方建一郎「文雄上人の仮名遣説について」、佐藤喜代治「漢語の問題」二名の講演があつた（『国語学会会報』八、昭和二十三年一月。国語学会編『復刻国語学会会報』昭和六十年、武蔵野書院所収）。「三五会」は明治三十五年三月、府立一中を卒業した純一・好日ら同級生の会のこと（第四報参照）。「宮永君」は「三五会」一員で、宮永梅三（『如蘭三五会々員名簿』昭和二十七年）。⑭書翰には、「宮永君が一中の会をしたと報じたので、小生の事もつたへて下さつた由ですが、昨日大兄の御たよりと同時に宮永君のハガキが来ました」とあり、純一や好日らとは頻りに消息をやりとりしていたと思われる。

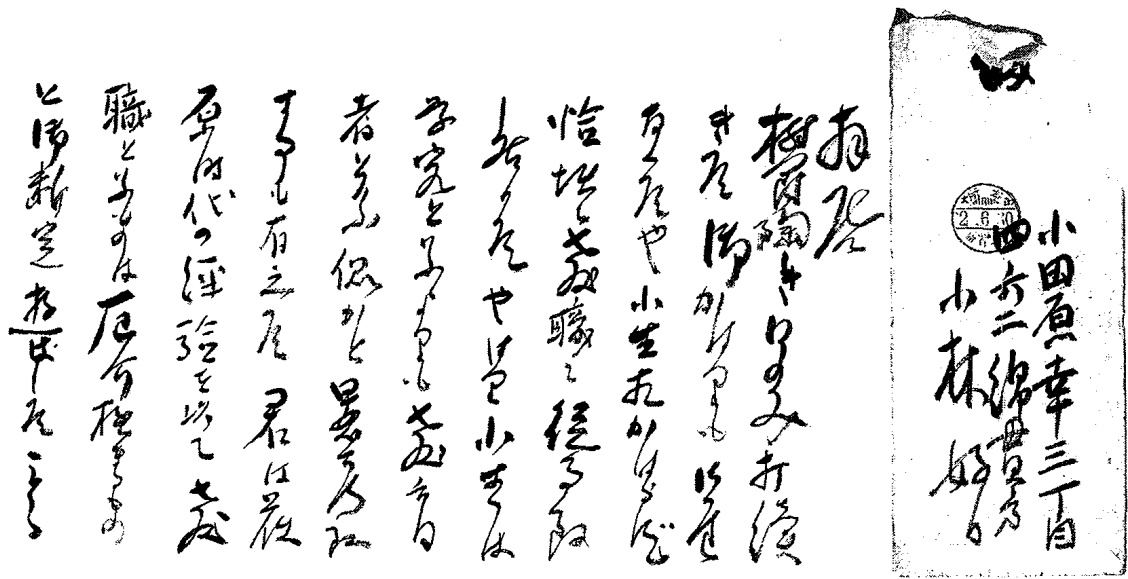
窪田忠彦（一八八五—一九五二）は、東北帝大の同僚であり（昭和二十二年八月に理学部教授を定年退官）、府立一中の「同じ五年で甲組で」、晩年の好日が「特別の交情を持つてゐた人物（⑪書翰）。『幾何学の基礎』（昭和十六年、岩波書店）、

『歯車の幾何学』（昭和二十二年、河出書房）といった著作がある。退官後の昭和二十四年十一月から昭和二十七年八月まで統計数理研究所長を務めた。「目白の女子大」は学習院女子大学。「東條君」は既出の東條操（一八八四—一九六六）で、東洋大学教授から学習院大学教授に転じた時にあたる。府立一中では純一・好日らの二年後輩である。

「九段の持家を小林国語研究所といふ財団法人」とした「小林昌治君」は、九段下に千秋文庫を設立した小林昌治（一九二一—一九八一）のこと。千秋文庫は、秋田藩主佐竹家三十四代当主佐竹義春侯の家令職であった小林昌治が、昭和十七年、その所蔵する資料を譲渡され、それを後世に伝えるべく昭和五十六年に設立した文庫である。好日との関係は、佐竹家との関係が始まる以前、小林昌治が万上閣（或いは、小さい文学社）という出版社を営んでおり、好日がそこから自著『増鏡選釈』（昭和四年）・『国語学概論』（昭和五年、昭和七年再訂）・『新註増鏡』（昭和五年）を出版した縁による。小林国語研究所の構想は不調に終わったが、好日の埋葬（世田谷区北烏山妙寿寺）に上京した遺族が小林昌治のもとに立ち寄るなど交流があった。なお、好日の旧蔵書は、好日の歿年に福井師範学校に移譲され、福井大学に「好日文庫」として現存する（『小林好日旧蔵書目録』昭和四十三年）。

五ヶ月後の退官を前に「浮腰になつてしまつて」、「早く東京に帰つて諸友と旧交をあたゝめたくおもつて居」たのだが、その願ひも結局は叶わずにしまった。昭和二十三年二月十一日午前一時五十五分、急逝（<sup>⑩</sup>書翰）。好日の無念、察するに余りある。

（謝辞） 本稿を作成するに当たり、佐藤武義氏・小野正弘氏から資料提供を受け、飛田良文氏・小林成子氏からご教示を得ました。ここに記して謝意を表します。



【図版1】 小林好日書翰（大正2年6月29日付）



【図版2】 『新声』誌友懇談会の写真（明治34年10月27日、前列右から三人目が児島（橘）純一）